

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二4:16~18 「いつまでも続くもの」

[16]「ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」

パウロは福音を宣べ伝えることにおいて勇気を失わないと言う。それは、彼の務めはあわれみによって神に任じられ(4:1)、その資格は神からのものであるから(3:5)、誰かに中傷され、疑われ、否定されても意に介さない、勇気を失わないのである。またもう一つの理由は、福音のためにいかに多くの苦しみや迫害を受けようとも、そこに主イエスのいのち、復活の力が現れ、多くの人々が救われ、神の栄光が現れるようになるからである。

「外なる人」とは肉体、外見、生まれながらの人間性を表す。「内なる人」とはイエス・キリストを信じて新しくされた自己のこと。たとえ老化、病気等によって外なる人が衰えても、内なる人はイエス・キリストにあつて日々新たにされ、変えられ、きよめられていくのである。これはキリスト者に与えられているすばらしい特権であり希望である。

[17]「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです」

パウロが信仰のゆえに受けている患難は実際には軽いと言えるようなものではなかったが、それでもやがて来る未来の栄光に比べれば、言うに足りないほどのものなのである。私たちがこの世に生存する年月は短い。その間にいかに大きな患難が来ようとも、それはやがて私たちが行こうとしている永遠に比べれば、つかの間のことである。そしてこの信仰者が受ける地上の患難は決してそれだけで終わってしまうものではなく、私たちのうちに働いて測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすのである。創世記37~50章に書かれているヨセフの生涯を見る時、神がさまざまな患難や苦しみを通して彼を練り鍛え、栄光に輝く人生に変えていったことがわかる。そしてそれはやがてイスラエル民族を救うこととなったのである。

苦しみにあっている最中には、それは決してうれしくも楽しくもない。しかし、それは、その人のうちに働いて重い永遠の栄光をもたらす時が来る。

[18]「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです」

モーセはヘブル人であったがエジプトの王子として育てられた。彼の行く手は輝かしいものであった。しかし、彼はその道へ進むことをよしとせず、ヘブル人同胞と共に苦しむ道、神に従う道を選んだ。→ヘブル11:24~26 彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのである。クリスチャンが多くの苦難に耐えることができるのは、彼らの忍耐力によるものではなく、彼らが永遠に続く大いなる希望を持っているからである。私たちがこのいつまでも続くものを見つめて、患難の中でも信仰を新たにしていって歩いていくことが大切である。